
騎士王と破滅を呼ぶ者

死体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士王と破滅を呼ぶ者

【Nコード】

N0976Y

【作者名】

死体

【あらすじ】

これはifの物語。独りぼっちの少女を見て、少年は何を思うのか。転生した世界で、少年はあることを誓う。それは、どのような結末を迎えるのか……。簡単に言えば転生ものです！あまり更新できませんが、応援してくださいッ！！

プロローグ（前書き）

「ここは何処だ？」

by 主人公

プロローグ

「貴方は死んだので、転生してください♪」

「え、何それ怖い」

どうしてこうなった？

「——っというわけで、貴方は死にました」

「フムフム、なるほどなるほど……」

気付いたら俺は真っ白な空間にいた。へ？ 理由？ それはだな——

「……つまりあれか？ 俺はお前がやった暇潰しのために強制的にトラックに轢かれ、てか当たった？ それで、挙げ句のはてそれが別の奴にバレそうだから転生しろって言うてんのか？」

「はい、その通りです！ しかし貴方も運が無いですね。60億分の1の確率で当たってしまうなんて」

「ああ、まったくその通りだよ。………ってちょっと待て！ なに他人事みたいに言うてんの！？ お前が原因だろ！？」

ん？ なに言ってるの？ と言わんばかりに首を傾げる少女。う、ウゼー。

「つたく、お前は何様だ！」

思わず少女に向かって大人気なく叫んでしまった。しかし、少女はその言葉を待っていたとばかりに、無い胸を張り、

「私は神様ですッ！！」

そう、満面の笑みで叫んだ。

さて、そろそろ説明しようか。皆も俺たちが何を話しているかわからなさそうだし。

俺は何処にでもいる普通の高校生だった。学校に行って、学友とたわいもない話をして、日常を少し退屈に過ごす。そんな、ごく普通の一般人だった。

それがどういう因果なわけか、ある日いつも通り登校している俺の

元にトラックが突っ込んで来た。

——空から。

今でもあのまた不思議な光景が目には焼き付いている。太陽の光が遮られ、ふと顔を上げるとそこには空に浮かぶトラック。

……天空の車ラピュタか！ 思わず心でツツコンでしまった俺は悪くないはずだ。

んで、目の前のあり得ない光景で固まってしまった俺は、身動き一切せずそのままトラックに押し潰されてしまったんだ。

そう、そこで。本来なら俺の人生はB A D E N Dで終わってしまはずだった。

だけど、奇跡が起きた。死んだはずの俺は目を覚まし、真っ白な空間にいた。そこで少女——神様に出会っちゃったんだ。

……わかる人はわかるか？ 要するに俺は、ただ今転生する直前まで来ているんだ。

以上、説明終わりッ！！

「いやー、他の神様にバレると権限が下がってしまうんですね。だから、貴方には転生させてもらいます」

「知るか、お前のことなどどうでもいい。それより俺を元の世界に戻せ」

「無・理♪」

「清々しいほど笑顔だなおいッ!!」

なにコイツ! もう一度言おう。なにコイツ!!

殴りそうになるのを必死に抑えながら俺は少女を睨み付ける。一方、少女はというと――

「いやー、セイバーちゃんマジ可愛い! 結婚して!!」

堂々と俺の目の前でマンガ本を読んでいます、はい。

てか誰だお前。最初とキャラ違いすぎるだろ。

「ねえーねえー、貴方もそう思いませんか? セイバーちゃんホントに可愛いッ!!」

「……セイバー？ 誰だそれ？」

ふと少女が聞いてきたので首を傾げて否定する。セイバー？ 剣士か何か？

俺がそう答えると次の瞬間――

「……………え？」

何か神様がとんでもないものを見るような眼で俺を見てきた。

……おい、何だその目は。え？ 俺が悪いの？

「……………え？ え？ ちょ、ちょっと待ってください。セイバーですよ？ Fateですよ？ 腹ペコ王ですよ？」

「いや、知らねえし。てか最後のなに？ 腹ペコ王ってなに？」

「……………はぁ」

……あれ？ 何で俺飽きられてんの？ 何で神様超高速で指動かしてんの？ 何で怒ってんの？

「怒ってませんよ？ 怒ってなんか……ッ！！」

「絶対怒ってるよね!? 心読んで絶対怒ってるよね!?」

神様は少女みtainな笑みを浮かべているが、絶対嘘だ。だって目が笑っていないもん。

「ああそうそう。貴方が逝く世界が決まりました。名前はFate。死亡フラグいっぱいの世界ですよ。よかったですね♪」

「いく字が違うッ!! しかもよくないッ!!」

絶対コイツ根に持っているだろ!? え、なにFate? それはいったいどういう世界なんだ!?

「ああ、ちなみに貴方が転生するのはセイ……ごほん、あるキャラがまだ生存している時代なので、下手をするとすぐに死にますよ?」

「何言ってるんのコイツッ!?!」

え? マジで? 俺そんな時代に転生するのか? ヤバいつて! こんな俺じゃすぐ死んじま……そうだ!

「おい神様ッ!! 頼むから俺に一つ能力をくれ! 出来れば『めだかボックス』の——」

「あ、挙げる能力はすでに決まっているから♪ じゃ、用意もすんだことだし、いってらっしゃーいッ!!」

「人の話を聞け落ちるうううううううううううッ!!」

独裁者並の我が儘を言われ、気付けば俺の足下から地面はなくなり、

——夢の始まり——（前書き）

『それでも私は……皆に笑っていて欲しいんです』

b yアルトリア

——夢の始まり——

——夢を見た。あの日、全てが変わってしまった日のことを。

広い草原の下に存在する、大きな岩。その岩に突き刺さる、一本の剣。

王を選定する黄金の剣、『カリバーン』

抜いた者は王となり、二度と人に戻ることはなくなる。ブリテンの王を決める、聖剣。

朝日に照らされて輝くその剣の前に、一人の少女がたつといた。

アルトリア・ペンドラゴン。

彼女はその金色の髪を青い布で縛ると、突き刺さっている剣の柄を掴み——

『待たれよ』

声が、聞こえてきた。

その剣の向こう側。腰を掛けるにはちょうど良い高さの岩に、ロングコートを羽織り、フードで目元を隠す一人の老人がいた。

魔法使い、マーリン。

彼女を幼少時代から支え、彼女の良き理解者。その彼が、彼女を止めようとしている。

『その剣を抜く前に、よく考えられよ。その剣を抜くということは、人を止めること。歳も取らず、王として生きるしかなくなるのですぞ』

『……はい、わかっています』

彼女は微笑む。目を瞑り、昔を思い出す。

確かに、辛いことが待っているのかもしれない。けど、だけど――

『……それでも私は、皆に笑っていて欲しいんです』

そう、それだけ。それ以外の理由など、必要ない。

彼女は目を開き、後ろに振り返る。そこにいる誰か――黙ったまま、必死に何かを耐えてるような少年に向かって、微笑みながらそれを告げた。

『

』

その瞬間、人吹きの風が吹く。その声は風に消され、何も聞こえない。

——けど、心はきつと……届いたのだろう。

彼女——アルトリアは前を向き、剣を握り締める。

そして——

剣を——引き抜いた——

俺の日常（前書き）

「不幸だ————ッ!!」

b y レン・クラウディア

俺の日常

「…………んあ？ 朝か…………」

何だろうか？ とても懐かしい夢を見ていた気がする。…………まあいっつか、所詮夢だろう。

まだ暖かいベッドから抜け出し、閉まっていたカーテンを開く。

「…………うん、憎たらしいほどいい天気だ」

雲一つない青空を見上げ、俺——レン・クラウドディアは呟いた。

俺——レン・クラウドディアが転生してから早数十年の月日が流れた。生まれたのは外国の何処かで、現代よりずっと前の時代に転生してしまったようだ。

あ？ 何でそんなことがわかるかだと？ そんなのあれだ。だって騎士だぜ？ いったい何時の時代なんだ今は。

俺は何処かの農家に生まれ、のんびりと人生を満喫していた。

……………うん、でも一応特訓はしてたぞ？ 何故か押し入れにあつた剣を子供の頃から毎日素振りしてるし。おかげで今じゃ朝から晩まで振っても疲れなくなった。

ま、素振りしている所を子供に見られりして色々あったが、その子供とも仲良くなったがな。

んで、そいつの名前はアルトリア・ペンドラゴン。

ぶっちゃけ、かなりへんな奴だった。

少女なのに男装してるし、剣振ってるし、何か湖の上に立ってるし。

……って湖の上に立つってお前人間か！？ 能力者なのか！？

そんな感じで、俺とアルトリアは剣術を鍛えたり、将来について話たりして過ごしていた。……そういえば、剣の握り方を教えてる時に後ろから見易いように抱いたら顔を真っ赤にしてたけど……気のせいだよな？

ああそうそう。そういえば、アイツの紹介を忘れてたな。

何時も通り特訓していると、ふと紫色のコートを羽織った老人がアルトリアの所にやって来た。

そいつこそ、魔法使いマーリン。

どうやらマーリンはアルトリアを護衛する任務に就いており、こうやって様子を見に来たそうだ。

何でも、今までは全部まかれていたらしい。……アルトリア、お前いったい何者なんだ？ 何で護衛がお前につくんだよ。それどうやって逃げてきた？

しかも最初会った時、凄い表情で睨まれたっけ。そうだな、例えるなら……「お前何かに娘がやれるか！」って言う向こうの親父さんみたいな？

まあその後、アルトリアの説得を受けて何とか謝って来たが……そういえば、仲直りの握手とやらをした時、何か凄い笑みを浮かべてたな。あれは絶対イタズラを考えてる笑みだ。

んで、そんな感じでのんびり過ごしてたんだが……ある日、奇妙な噂が流れた。

何でも、いきなり岩に突き刺さった剣が出現したらしい。しかも、それが王を選定する剣『カリバーン』らしい。

……うん、もう俺は驚かないぞ。アルトリアが水の上に立てるような世界なんだ。例えいきなり剣が現れても絶対驚かないからなッ！！

第一、俺は騎士でもないから抜けないしな。俺には関係ない！ そ

う思ってたら……

——アルトリアの野郎が、剣を抜きやがった。

……これには流石の俺でもびっくりしたわ。え？ マジで？ これ何のドッキリ？

実はアルトリアの奴、前の王、ウーサー王の隠し子だったらしい。だから王の血筋で剣が抜けたそうなんだ。

……って血筋で抜けるって何！？ お前は勇者か何かか！！

まあそんな感じでアイツが王になり、なんやかんやしていたら——

……気付いたら、俺も円卓の騎士の一人になっていた。

いや、ホントはそんなのになるつもりはなかったんだぜ？ けど何かスカウトされたり、バカにしてきた奴らを完封なきまで叩きのめ

したりしていたら、気付けばアーサー王に遣える13人の一人になっていた。

……はあ、不幸だ。

「あー、めんどくせ……」

俺は寝間着を着替え、何時も通りの黒コートを羽織り、フードで目元まで隠した。

あ？ 鎧？ あんなの着れるか。第一なんで普段着から重い服装をしなければいけないんだ。

”コンコン” 『失礼します』

そんなことを考えていると、扉をノックされた。ああ、もうそんな時間か。

「ああ、いいぜー」

そう答えると扉が開き、外からメイドさんが入ってきた。……メイドってこの時代からいたんだな。

「朝食をお持ちしました」

「おう、何時も悪いな」

「……別に、仕事なので」

そう無表情に答えるメイドさん。……俺なんか悪いことでもしたかな？

まあとりあえず、さっさと飯にするか！

「うん、今日も絶品だったな。……あの味はどうやって出すんだろうか？ 今度教えてくれるかな？」

朝食を食い終わり、食後の運動というわけで俺は宮殿の中を歩き回っていた。

……てかさ、なにここ？ 何で周りを見渡せばイケメンしかいないんだ？ おかげで恥ずかしくて顔を出せねえ。

ん？ アイツは……。

「よお、ランスロット。今日は早いじゃねえか」

「む？ 貴方こそお早いですね、レン」

そこいたのは一人の騎士。黒髪でその美貌は数多の女性を虜するほ

ど美しい。」

湖の騎士、サー・ランスロット。

円卓の騎士最強と呼ばれる男がそこにいた。

……とりあえず、一言言いたい。

「イケメンもげろ」

「？　　どうかなされましたか？」

「いや、別に……それよりどうしたんだ？　　そんな刀身が磨がれてない剣なんか取り出して？」

そう、ランスロットの奴どういう訳か剣を持って歩いてたからな。しかも自分のじゃない、稽古用の剣を。

「ああ、これはですね。少し前にガウエイン卿に誘われましてね。よかったら貴方も御一緒にしますか？」

「勘弁してくれ。お前と稽古なんて面倒なことさせるな。第一、俺がアイツのこと苦手なの知ってるだろ？」

「フフ、やはり貴方らしいですね」

そう言って女性ならコロッと落ちてしまいそうな笑みを浮かべるランスロット。

まったく、マジで勘弁してくれ。ランスロットと稽古になったらガチ

でいかねえと瞬殺されるしな。オマケにガウエインはやたら俺に怒ってくるし。騎士道？ 何それおいしいの？

じゃあ、とランスロットと別れると俺は宮殿の出入口に歩き出した。

「さて、久し振りにアイツらに会いに行くとするか」

俺はアイツにバレないように慎重に、迅速に進み――

「何処へ行くのですか、レン」

――即効でバレました、はい。

出入口の前に立つのは一人の王。青い服に鎧を纏い、金色に輝く髪を青い布で止め、黄金の剣を地面に突き刺して立っていた。

「……何でお前がここにいるんだ、アルトリア」

「貴方が逃げようとするからです」

そう言ってブスーと睨み付けるアルトリア。……いや、なんでさ。お前王様だろ？ 玉座に座ってるよ。後びっくりして門を守る兵たちが固まっちゃってんじゃねえか。

「第一、俺はちゃんと書類出しただろうが。別に問題ない――」

「それは昨日のです。しかも貴方だけが最低限のノルマしかクリアしていません」

よって、そう言うとき大きく息を吸い、

「貴方は私が今日つきっきりで書類を終わらせてもらいますッ!!」

.....

.....

.....

な、なんだって——ッ!!

そりゃないぜアルトリア！ 今日一日中宮殿に閉じ籠るなんてアンタは俺を殺す気か！？ こうなったら……

「諦めなさい、もうじき他の騎士たちも来ます。貴方に逃げ場はありません」

「はっ！ 悪いがアルトリア、俺の辞書に……諦めるって文字は存在しねえ!!」

俺は横で呆然としている兵士から剣を抜き取ると、アルトリアに向かって突っ込んだ。

「いいでしょう。ならば……正面から叩き伏せるのみ！」

アルトリアも地面に突き刺した剣を抜き、構える。

黄金の剣と無名の剣。二つの剣がぶつかる次の瞬間――

「……なんてな♪」

「え……………？」

俺はニコリと笑い、対照的にアルトリアの表情が絶望に染まる。

その視線の先にあるのは俺の右手。そこに握られているのは――

「対アルトリア666道具の一つ！ 『激辛煙り玉』」

ポフッ！ と辺りに白い煙が巻き散る。

「ごほごほごほ！ め、目が開けられない！ れ、レン！ 貴方も騎士なら正々堂々と戦いなさいッ！！」

アルトリアはどうやらまともに食らっちゃったらしい。目から大量の涙を流し剣を振り回している。

え？ 俺？ 最初から目瞑ってたし息もしてなかったから無傷ですけど何か？

「ハッハッハッ！ あばよとっつあっんッ！！」

俺はカオスと化したその場から離れ、町へと走り出す。後ろから足音が聞こえてくるし、さっさとおさらばするとしますか！

「ま、待ちなさいレン！ 帰ってきたら覚えときなさい！！」

後ろから、アルトリアの涙声が聞こえてきた……。

「あ、レンだ！ 遊んでくれよ！」

「れ、レンさん！ よければその、後でお話しても……」

「おう坊主！ よく来たな！ ちよっくら飯でも食ってけ！！」

「あーもう、いいからどけーッ！！」

町に出た直後、何故か俺の周りには人が大量発生していた。

何故だ？ これでも一様フードで顔を隠してるというのに……？

「そんなのレン様を一目すればすぐ分かりますよ」

「マジで！？」

驚愕の事実に驚く俺。え？ マジで？ 今までの俺の努力はなに？

「それよりレン兄ちゃん！ 早く遊んでくれよ！」

「早く、早く！」

そうやって俺のコートを引っ張る子供たち。おい、止めろ。服が伸びるだろうが。

「まったく、はいはいわかったから。今行くから少し待て……ん？」

子供たちに引っ張られるように移動しようとすると、ふと感じる視線。辺りを見回すと、一人の少女が目についた。

「……………あ」

俺と視線があうと木の後ろに隠れ、少し経つとひょっこり顔だけ出してこちらを見つめてくる。

……………ふむ。

「？ どうしたの兄ちゃん」

「あ？ 悪い、少しここで待ってくれないか？」

俺は子供たちにそう告げると、そっと木の後ろに隠れてる少女に近付く。

「よお、どうかしたか？」

「あ……あの、えっと……」

突然俺が現れたことに驚いているのか、少女は口をゴモゴモと動かして焦っていた。

俺はそんな彼女に手を伸ばし、

「どうだ？ お前も一緒に遊ぶか？」

「え……」

すると少女は驚きの声をあげた。まるで誘われるとはまったく思っていない表情。

「で、でもわたし……」

「――よっと」

「きゃ、きゃあッ!？」

少女は呆然と俺を見つめる。ん？ 何をしたかって？ 肩車しただけだが？

「どうだ？」

「……うん、高い。凄い高い！」

少女は先程とは別人のように笑い、キヤーキヤーと俺の頭を掴みながら叫んだ。正直言ってるさい。

「あー！ いいなー！ 俺にもやってくれよ！」

「はいはい、また今度な。それよりも今日は何して遊ぶんだ？」

「鬼ごっこ！」

「鬼ごっこ……ですか……？」

「ああ、お前は知らなかったな。いいか？ 鬼ごっこっていうねはな——」

その日、俺は太陽が沈むまで遊んだ。

その後——

「あの……何で俺は椅子に縛られてるんでしょうか……？」

宮殿に戻った俺に待っていたのは、他の円卓の騎士で、抵抗する間もなく取り押さえられ、椅子に縛られてしまった。

ほんと、なんでさ……？

ランスロットは同情してるように苦笑し、ガウエインの奴は凄い形相で睨んでくるし。

「よくやってくれた皆の者。礼を言う、下がってくれ」

すると、アルトリアがやって来た。

彼女の言葉に礼をすると解散していく円卓の騎士。何故かランスロットが”頑張れ”的な笑みを浮かべてただけど……？

その前に、一言言っておかないといけないことがある。

「……なあ、アルトリア。この書類、なんだ？」

そこにあつたのは大量の書類。天井にまで届きそうな書類の山が、そこにあつた。

「これは貴方の書類です。今日サボった分、寝ないでやってもらいますからね」

「……え？」

嘘、今なんて言った？ 寝ないで？ これを全部？ ……………。

「不幸だ————ッ!!」

俺の日常（後書き）

バーサーカー（第四次）めっちゃくちゃカッケェッ！！
ランスロ
ット最高ッ！！

設定

〈名前〉

レン・クラウディア

〈容姿〉

普段から黒コートを羽織り、顔をフードで隠しているため、ほとんどの人がその素顔を知らない。

ちなみにその素顔は黒目黒髪で、中々の顔立ちだが、周りが全員イケメンばかりなので、ブサイクだと思っている。イケメンもげろ。

〈性格〉

基本面倒ごとが嫌い。必要最低限の仕事はするがそれ以上はサボる。それが原因でよく怒られる。

騎士なのに騎士っぽくない。卑怯。何故かカリスマ性があり、町に行くのと町民に囲まれる。後子供のなつき度が半端ない。

剣の才能がなく、努力だけで円卓の騎士の座に上り詰めた。幼なじみが王になっても態度は変わらない。

人を殺すことは嫌い、根は優しい人。

〈実力〉

剣士。武器を選ばず色んな剣を使う。本人いわく「切れ味がわるくなったから落ちてたのを拾っただけ」。使えばなんでもいい。戦うことを嫌い、決闘を申し込まれても全力で逃げようとする。けど実力はトップクラス。サー・ランスロットといい勝負らしい。

何故か魔法使いマーリンに気に入られ、イヤイヤ魔法（魔術）を教わる。けど絶対使いたくない。何かムカつくから。

〈二つ名〉

- ・黒騎士
- ・黒の剣士
- ・不完全な騎士
- ・偽物の騎士
- ・黒衣の騎士

設定（後書き）

始めたばかりですみませんが、アンケートです。

主人公の二つ名は、いったいどれがいいでしょうか？ 上のヤツから選んでもいい、オリジナルでも構いません。作者が気に入ればそれにします。

期限は無期限。よろしく願います。

決闘？ 勘弁してくれ……（前書き）

「……強いんじゃない。ただ、強くなりたいだけだ」
by レン・クラウディア

決闘？ 勘弁してくれ……

——その光景は今でも覚えている。

夕焼けに照らされた漆黒の髪。

血に染まった手で剣を掴み、それでも放さない腕。

彼は微笑み、血だらけの手をこちらに向け——

『俺の名前はレン。レン・クラウド。よろしくな？ アルトリ
ア』

それが、私たちの fate（運命）の始まりだった——

「レン・クラウド！ 今から貴様に決闘を申し込む！！」

「……………はい？」

どうしてこうなったのだろうか？ 俺——レン・クラウドは少し前のことを思い出していた。

今日は何時を通り無表情メイドに叩き起こされ、朝の鍛錬の後、怒られたくないから必要最低限の書類を終わらせ、アルトリアに提出しに玉座の部屋に来て——

いきなり決闘を申し込まれた。

……うん、意味がわからない。何故に？ What, t?

「……えっと、モードレッド？ 今なんて言ったんだ？」

「だから！ 私は貴様に決闘を申し込むと言ったんだ！！」

そう叫ぶモードレッド。……やっぱり聞き間違いじゃなかったか。

モードレッド。

円卓の騎士の一人で、幼い頃のアルトリア——いや、今の王とそっくりな顔をしている騎士。

……ぶっちゃけ、アイツの息子だよな？ てか男でその女顔はどうよ？

「……えーと、モードレッド？ 一つ聞くが何でだ？」

王のそっくりさんに問いかける。するとモードレッドは剣を俺に向け——

「貴様のような騎士の恥、王に泥を塗るだけだ！ 私が勝てば、貴様には円卓の騎士の座から引いてもらう！！」

そう、はっきりと宣戦布告した。

(……………うわ、めんどくさいな——)

俺は心の中で呟くと、深くため息を吐いた。

まったく、こういう輩は本当に面倒だ。己れは間違っただけだ。ただ王の道を阻むものは容赦なく斬る。そう微塵も疑ってない者の目だ。

(……………まあ、無理もないか。俺の行動を見てたら)

仕事はサボる。卑怯、騎士道の欠片もない行為。王に尊敬を感じない行動。そして——

——ただの、農民のくせに。

そう、きっとそれなのだろう。自分以外は皆、優秀な王や貴族の息子だち。それなのに、どうして自分みたいな存在がいる。そのことを、彼らは許せないのだろう。

うんうん、と頷く過半数の騎士を見て、敵は多いな——と、どうでもいいことを考える。

……てか、この決闘に乗っても何にも俺にメリットがないよね？
てか面倒だ。

まあアルトリアなら止めるだろ、アイツ真面目だし。何てことを考
えながら断ろうと口を開き――

「ほお？ なかなか面白そうではないかの？」

――突如現れた声に止められた。

こ、この声は……！

「……マーリン？ いつ帰ってきたのだ？」

突然現れたマーリンに、アルトリアが驚きながら言った。

「いやいや、つい先ほど調査が終わって帰ってきたばかりですがな。
しかし、決闘かの？」

そう言ってニヤニヤ笑うマーリン。や、ヤバい。俺の第六感が今す
ぐ逃げろと叫んでる。あの笑みは、間違いなく俺にトラブルを巻き
込ませる気だ……！

「わ、悪いが断る――」

「王よ、ここは一つやらせてみてはどうですか？」

「む、だがかし……」

「王として部下の力を知るにはちょうど良い機会だと思いますが？」

「なるほど、そう考えると……」

「——って説得されてらっしゃる!？」

先手を打って断ろうとした所、気付けばマーリンのクソジジイにアルトリアが説得されていた。

おいそれでいいのか王様！ アンタそれでも国を背負う王なんだろ。そんな簡単に言いくるまれていいのか!？

「……よし、では円卓の騎士モードレッドと、円卓の騎士レン・クラウディアの決闘を認めよう」

「ハッ！ ありがたき幸セッ！」

「おい！ ちょっと待——」

「……どうしてこうなった……?」

呆然と、呪うような絶望した声で呟いた。

場所は変わって宮殿の稽古場。そこには騎士たちが見守るように囲っており、その中心に俺とモードレッドが佇んでいた。

……くそ、囲まれているから逃げられねえ……！

「いくぞ。今の内にこれからどう過ごしていくか考えておくのだなッ！」

そう言うと、見ただけで名剣だと分かる剣を抜き取り、睨み付けて来るモードレッド。

『良いか？ 二人とも』

すると、声が上の方から聞こえてきた。チラリと横目で見ると、会場の上にある特等席から王と円卓の騎士、そしてこの事件の原因であるマーリンがいた。しかもマーリンにいたっては審判までしようとしていた。

なにやってんだ爺さん……。

『では決闘を始める前に二人が賭けたものを確認するぞ？ まず始めにモードレッド。お主が勝てばレン・クラウディアは円卓の騎士の座を脱退。それで良いかの？』

「はい、その通りです」

そう頷くモードレッド。

『では次にレン・クラウディア。お主が勝った場合、十日間の休暇が与えられる。……本当にこれで良いのか?』

「ああ、それで構わない」

同じくそう言って頷く俺。……ん? あ、この約束? これは勝負を公平にするためにお互い勝った時の条件を決める時に決めたものだ。

いや、たまにはおもいつきし休んでみたいじゃん? 何時もみたい
にチマチマじゃなくて、こう温泉にも行ったりして豪快に休みたい。
……あ? 誰だ何時もサボってるとかほざいた奴は。

『ふむ、よからう。ならば両者、前へ』

「く、この騎士の恥が……最後までそのようなことを述べるか!」

モードレッドはもう殺気で人を殺せるんじゃない? とばかりに俺を
睨みながら前へ出る。

……さてと、

「おい、そこのお前。剣を少し貸してくれねえか?」

『え? あ、はい!!』

今の俺は丸腰。剣を一本も持っていなかった。なので、後ろにいた
黒髪の少年——騎士B君に剣を借りると、前へ歩きながら一気に鞘
から刀身を引き抜いた。

そこにあるのは無骨で何処にでもありそうな剣。とてもじゃないが、名剣とは言えなかった。

けど——自分にはこれがいい。これくらいが、お似合いだ。

本当は自分なんか円卓の騎士にむいてない。自分は彼らみたいに、強くなんかない。

『お前、やったじゃねーか！ あのレン様に使ってもらえるなんて何て羨ましいんだ！』

『凄いよね。武器を選ばず、全てを一流に使いこなせるんでしょ？ いつか僕もあの人みたいに……！』

『でもまずは一つのことを極めないと。話はそこからだよ。……でも、そう考えると本当にレン様って凄いよね』

後ろからそんな会話が聞こえてきた。それを聞いて思わず苦笑する。

違うと叫びたかった。自分は強くなんかない。全てにおいて中途半端で、何一つ一流になれない才能の無い屑なのだ。

俺に——剣の才能なんか、まったくくないと言うのに。

両者が指定の位置に着き、剣を構える。

『ふむ、どうやら準備はよろしいようだの』

マーリンの声を無視し、意識を集中させていく。イメージするのは水面。そこには音など存在せず、あるのは波を気配のみ。

眼を瞑り、意識を極限にまで集中する。気配が、自分と目の前の男以外感じなくなる。

そう——まるで、自然と一体化したような、感覚。

『よし、では——始めッ!!』

「いくぞレン・クラウディアッ！ 貴様も円卓の騎士の一人だと言うのなら、その強さで証明してみせよ!!」

開始の合図と同時にモードレッドは剣を振り上げながら突っ込んできた。

……まったく、どいつもこいつも勘違いしてやがる。俺は強くない。強かったら、こんな一試合にここまで全力で挑むはずがない。

俺は——

「……強いんじゃない。ただ、強くなりたいだけだ」

瞑っていた眼が開く。剣を握り締める手に更に力がこもる。身体中に神経を張り巡らせていく。

ダッ！ と地面を強く蹴り、前に進む。敵との距離は後数歩。俺は握り締めた剣を振り上げ――

――剣に火花が散った――

決闘？ 勘弁してくれ……（後書き）

……あれ？ どうしてこうなった？

どうも、最近この小説受けが良いのか悪いのかよく分からない作者です。

実はこれ、最初の予定ではガウエインが相手になる予定だったんです。ですが、やはりランキング2位は流石にきついかないと思いついて、変更いたしました。

まあこうすれば、フラグにもなりますしね！

さて、皆さんが言っていた主人公の矛盾については次回わかると思います。頑張れ主人公！ 戦え主人公！！

後マーリンは完全オリジナルキャラになってしまいました。だって……PS2持っていないんだもん！

……そういえばランキングですが、日刊ランキングを見た時はマジで驚きました。「え？ なにこれ？」と見た瞬間硬直してしまいました。

こんな読者の皆様にダメ出しを食らってしまう作者ですが、一生懸命書いていきます。

……あーあ、早く第四次聖杯戦争に入りたいな！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0976y/>

騎士王と破滅を呼ぶ者

2011年11月6日07時00分発行